

学校ぎらい感情と友だちタイプとの関連<sup>注1)</sup>

A Study of the Relationship between Unwillingness  
to Attend School and the Friend Type.

吉川栄子・高橋宗

Yoshikawa Eiko, Takahashi Shu

## 要 約

本研究は、学校ぎらい感情と友だちタイプとの関係について検討することを目的とした。予備調査と本調査を小学校の児童を対象に実施して得られたデータを分析し、学校ぎらい感情尺度得点により高群と低群の2グループを抽出した。その結果、学校ぎらい感情得点の高群と低群におけるソーシャルスキル得点のかかわりのスキルにおいて有意な差がみられた。学級内における友だちとのつながり状況について分析をおこなうために、ソシオメトリックの手法で8タイプを分類した。学校ぎらい感情の高群と低群における児童のつながりをソシオグラムに示してから分類をおこなった。その結果、タイプ4とタイプ5の間を境にして、学校ぎらい感情得点の高群と低群の逆転が生じていることが明らかになった。また、友だちのつながりタイプと学級満足度との関係を見るために、座標上にプロットした。分布状況は、大きくA領域、B領域、C領域の3領域のプロット分布となった。学校ぎらい感情の低群は、すべての友だちタイプが学級満足領域に分布していた。それに対して、学校ぎらい感情の高群に属するタイプ4・5・6・7・8は、座標上の交点付近に、特に、タイプ1・2・3では学校や学級への不適応行動のために支援を必要とする不満足領域に分布していることが判り、人間関係のつながりのスキルの弱さが、学級への不満や不適応行動を生み出していることが明らかになった。

**Key Words** : 学校ぎらい感情, 学級満足度, ソーシャルスキル, 友だちタイプ

注1) 本研究の一部は日本教育心理学会第50回総会(平成20年10月11日~13日開催, 東京学芸大学小金井キャンパス)において発表報告を行った。

### はじめに

近年、子ども達の不登校現象から、学校生活に適應できるか、できないかが大きな課題として活発に議論が行われるようになった。特に、学校生活に適應できない児童は、学級の中に身をおきながらも、孤独感や疎外感などの不適應感を抱いている。したがって、不適應問題として、早期の援助の必要性から、これらの児童の問題背景の分析と適應への適切な指導を含めた検討の必要が求められている。

学校生活において不適應に陥る原因の1つには、人間関係を上手く築けない子ども達が多くなっていることが指摘されている。人間関係の形成に必要な要因として、他者とのコミュニケーションを保つための社会的スキルの修得が、大きな役割を担っていると指摘されている。特に、他者の気持ちを配慮したり、直接に関わろうとする行動的スキルの不足が、孤独感や学校不適應感と深い関係にあることが、嶋田・戸ヶ崎・岡安・坂野（1996）によって明らかにされている。また、Peplau & Perlman（1982）は、不適應感を抱くようになる誘因感情の1つとして、「他者から見捨てられている」と言った孤独感の存在が大きいことを指摘している。戸ヶ崎・岡安・坂野（1997）らは、社会的スキルに注目をし、このスキルをバランスよく修得している児童や生徒は、環境に対するストレスへの判断やストレス反応のレベル値を低減させる働きがあると述べている。柴橋（2004）は、友人関係への「不満や欲求」に対しては、コミュニケーション・スキルが関係していることを明らかにしており、学校への適應は、児童や生徒が人間関係を上手くこなすスキルを形成しているかどうかによって、大きな影響を受けることが報告されている。

一方、長根（1991）は、小学4～6年生を対象に学校生活における児童の心理的ストレスについて分析をし、学校において児童が経験する心理的ストレスは、友達関係に関する出来事が極めて高いことを明らかにしている。古市（1994）は、学校生活の楽しさの規定要因として、小学生では、友人への適應の寄与率が高いことと、教師にたいする適應の寄与率も高いことを

報告していることが注目される指摘であろう。学校現場は、子ども達にとって心身の成長発達が著しい時期に、個々の児童一人一人が自己を他者との関係の中で自ら育成していく場である。その視点から考えても、子どもたちの学校への適応や集団的適応を支援することは大変重要で不可欠なものである。先にも述べたように、長根や岡安他によると、発達段階に影響を与える共通した要因として、友だち関係がどのような状況にあるかによって、個々の子どもにとって、大きなストレスナーになっていることが示されている。このことは、小学生が学校という社会的な環境にうまく適応していくためには、教師や保護者を含む大人社会から適切な指導や支援が提示されていく必要が求められているといえる。

このような視点から考えて、変化の激しい現代の社会環境の中で、児童・生徒における学校生活での人間関係がより安心できる場として存在する必要がある。これまで、学級集団内での友だちのつながりを育くむためには、対人関係を上手く築くためのソーシャルスキルの修得が重要な要因の一つになっていることを明らかにしてきた（吉川・高橋2007）。そこで、本研究では、それらの研究をもとに、学校ぎらい傾向の高い児童と低い児童との間における対人関係要因を明らかにする。とくに、ソーシャルスキルや友だちとのつながり状況（友だちタイプ）と学級への満足状況との関係などについて、どのような傾向が見られるか検討することを目的として研究をおこなった。本研究では、予備調査を小規模校で実施した後、同様の方法で、大規模校で本調査を実施して検討した。

## 方 法

### 被調査者

予備調査：滋賀県内のK小学校3～6年生（137名）

本調査：滋賀県内のY小学校全学年（1年生71名、2年生85名、3年生92名、4年生71名、5年生67名、6年生65名、合計451名）

**調査期間** 調査は、予備調査を2007年11月に実施し、本調査は2008年7月に実施した。

**質問紙** 調査に用いた質問紙は以下の通りである。また、質問項目として、以下の尺度が含まれるように構成された。

1. 学校生活についてのアンケート
  - ① 孤独感尺度（前田，1995）
  - ② 学校ざらい感情尺度（古市，1991）
2. Q-U アンケート（河村，1999）
3. ソーシャルスキルテスト（河村，2000）
4. 友だち紹介テスト

なお、調査項目に用いられた尺度の回答は、孤独感尺度が3件法、学校ざらい感情尺度が5件法、Q-U アンケートとソーシャルスキルテストは4件法で評定できるようにした。また、友だち紹介テストでは「休み時間などによく遊んだり、話をしたりする友達を3人紹介して下さい」といった記述形式で、学級の友だちの名前を書かせた。

**実施手続き** 児童の学校生活に対する気持ちや学校生活への適応の状況を把握するために、質問紙による調査を実施した。調査は、各学級単位で、担任が調査用紙を児童に配付し、記入上の注意事項を説明した後、開始した。調査時間は、各調査とも20分程度で実施し、全員の児童がほぼ記入した後、その場で調査用紙を回収した。

予備調査の実施は2007年11月。本調査の実施日は2008年7月。

**データ分析** 各調査の項目に従って、データ入力を行い、グルーピングに基づいて、対象となったデータの処理を行い検討した。また、友だち紹介テストは、ソシオメトリックの手法に基づいて処理し、友だちのつながり状況のタイプ別に分類を行い、各学級のデータをマトリックス図にもとづいて、友だちのつながりタイプ（友だちタイプ）の分析をおこなった。

**学校ざらい感情によるグルーピング** 学校ざらい感情尺度得点の両側10%の中にある値を高群、低群とし、グループ分けを行った。

その結果、予備調査のK小学校では高群として13名、低群として22名がその対象となった。また、本調査のY小学校では高群が79名、低群では65名が、その対象となった。

## 結 果

### 「予備調査」

予備調査で得られた、K小学校の学校ざらい感情得点の高群と低群において、どのような要因が学校ざらい感情に影響を与えているのかを検討するために分析をおこなった。学校ざらい感情得点

表1 各群におけるやる気のあるクラス得点の各項目の平均

		友達関係	学習意欲	学級の雰囲気	学校生活意欲
高群	平均	9.00	9.23	9.46	27.69
	SD	2.35	1.88	2.22	5.50
低群	平均	10.77	10.14	10.59	31.50
	SD	1.45	1.17	1.56	3.28

表2 各群におけるソーシャルスキル得点の各項目の平均

		配慮スキル	かかわりスキル
高群	平均	54.00	33.22
	SD	2.35	1.88
低群	平均	64.62	39.54
	SD	1.45	1.17

の高群と低群における、やる気のあるクラス得点の各項目の平均とSDを表1に示した。両群においてt検定をおこなったところ、友達関係と学校生活意欲の項目において有意差がみられた（友達関係： $t(17) = 2.46, p < .05$ 、学校生活意欲： $t(17) = 2.27, p < .05$ ）。次に、学校ざらい感情得点の高群と低群におけるソーシャルスキル得点の各項目の平均とSDを表2に示した。両群においてt検定をおこなったところ、配慮スキル得点においては有意な差はみられなかった。かかわりスキル得点においては、高群と低群との間に有意差がみられた（ $t(19) = 1.41, p < 0.05$ ）。

次に、学校ざらい高群と低群において、友達グループ形態がどのような状況を示しているかに着目し、友達のつながり状況を調査した。分析はソシオメトリック法の手法を用いた。友達グループの形態パターンを図1に示した。テスト結果から得られたソシオグラムについて、高群と低群別に図1にしたがって友だちタイプを分類した結果が図2である。学校ざらい感情の高群と

低群を比較すると、高群の方がタイプ1・2が多く、孤立タイプの児童比率が高いことがわかった。また、低群ではタイプ4・5が多く、複数の友達同士でグループを形成する傾向が多くみられた。

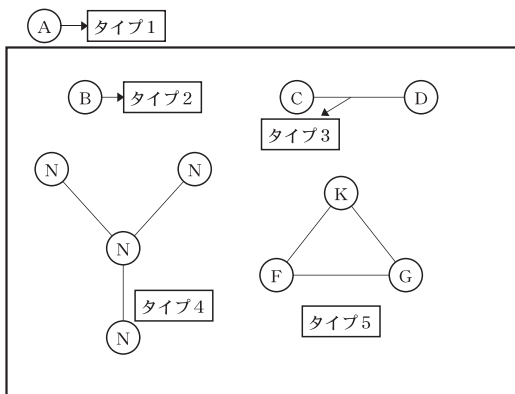


図1 友達グループのタイプ

「本調査」

予備調査では、調査対象がやや小規模の小学校であったことから、データにおける信頼性を高めるために大規模の小学校で同様の調査を実施し、検討を行った。得られた

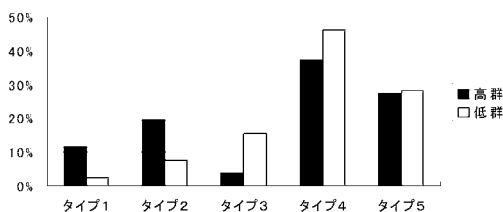


図2 各群における友達グループのタイプ別出現率

データから予備実験と同様に、学校ざらい感情尺度得点の両側10%の中にある値を高群及び低群といったグループに分けて分析をおこなった。

Y小学校の学校ざらい感情得点の高群と低群において、どのような特徴が見られるか、各調査項目の分析をおこない、学校ざらい感情に影響を与えている要因を見いだすための検討をおこなった。学校ざらい感情得点の高群と低群における、やる気のあるクラスをつくる各項目得点の平均とSDを表3に示した。両群においてt検定をおこなったところ、友だち関係と学級の雰囲気、学校生活意欲の3項目において有意差がみられた(友達関係:t(132)=7.76, p<.001 学級の雰囲気:t(124)=8.69, p<.001 学校生活意欲:t(136)=9.08, p<.001)。次に、学級内での友だち同士のかかわりが上手くできるかどうかは、他者に対する思いやる気持ち(配慮のスキル)とそれを直接行

動として示す（かかわりのスキル）ことが出来るか、といったソーシャルスキルがどれだけ形成されているかが問題とされる。そこで、予備調査と同様に、学校ぎらい感情得点の高群と低群におけ

表3 各群におけるやる気のあるクラス得点の各項目の平均

		友達関係	学習意欲	学級の雰囲気	学校生活意欲
高群	平均	8.78	9.03	8.68	26.48
	SD	2.03	1.94	2.13	4.58
低群	平均	10.91	10.26	11.11	32.28
	SD	1.25	1.58	1.15	3.04

表4 各群におけるソーシャルスキル得点の各項目の平均

		配慮スキル	かかわりスキル
高群	平均	56.13	33.68
	SD	7.94	6.43
低群	平均	66.02	40.08
	SD	6.68	5.25

るソーシャルスキル得点の分析を行い、表4に各項目の平均とSDを示した。それら両群においてt検定をおこなったところ、予備実験と同様に、配慮スキル得点においては有意な差はみられなかった。しかし、かかわりスキルの得点においては、高群と低群との間に有意差がみられた ( $t(142) = 6.57, p < 0.01$ )。このことから、学校ぎらい感情を高く示している児童は、相手に対する思いやる気持ちのスキルについては、低群との間に差が見られなかった。そのことから、他の児童と同じように、対人関係における気配りが出来ていると判断することができる。しかし、かかわりのスキルにおいて有意差がみられたことから、日常生活場面では、他者に関わっていくといった行動面でのスキルが、十分に形成されていないことが示された。

そこで、学校ぎらい感情の高群と低群において、学級内における友だちとのつながり状況について分析をおこなった。分析方法はソシオメトリック法の手法を用いて、相互選択によるつながりをソシオグラムに表記した。そのソシオグラム結果図から、学校ぎらい感情の高群と低群について、それぞれ、予備調査で行った5タイプ（図1）に基づいて分類をおこなった。その結果、友だちタイプによる両群の比較検討したのが図3である。結果からも判るように、高群では、友だちのつながりタイプでは、タイプ1・2が多くみられ、孤立児や周辺児といった児童の比率が高くなっている。それに対して、学校ぎらい低群では、タイプ4・5のような複数の友だちが関係した集団を形成するようなつながりを示しており、予備調査とほぼ同様の傾向が明らかになった。

また、この傾向が、学年間（年齢差）にどのような違いが見られるかを検討するために、低学年と高学年について分類し比較検討をおこなった。小学1～3年生を低学年群とし、小学4～6年生を高学年群として、友だちタイプの出現率について分析をおこなった。その結果、低学年における友だちのつながりタイプは、学校ざらい感情の高群では、タイプ1・2のような孤立児や周辺児を示す行動傾向が多くみられる（図4）。それに対して低群では、タイプ3や4の

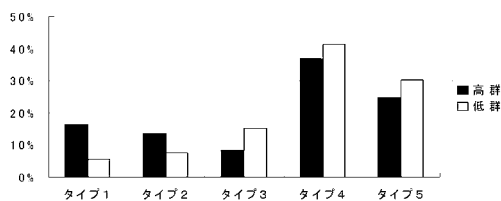


図3 学校ざらい傾向と友達グループのタイプ（全学年）

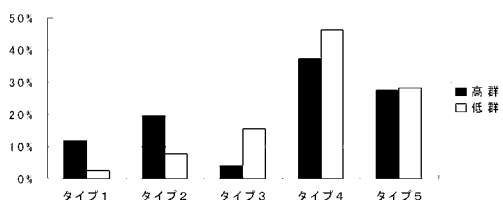


図4 学校ざらい傾向と友達グループのタイプ（低学年）

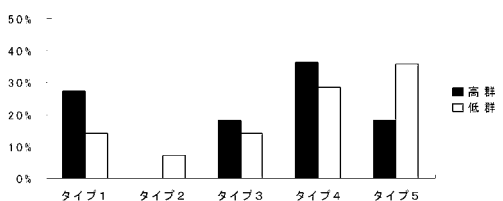


図5 学校ざらい傾向と友達グループのタイプ（高学年）

タイプが多く見られている。しかし、集団を形成するような友だちのつながりを示すタイプ5においては、ほとんど差がみられなかった。一方、高学年群では、タイプ4と5で逆転しており、集団を形成する状況が変わる転換点と見ることが出来る（図5）。このように低学年と高学年の間で、友だちのつながり状況が異なっており、成長発達と共に、友だち関係も個から集団への変化を遂げていることが明らかになった。

そこで、集団の形成状況を更に詳しく検討するために、ソシオグラム図から友だちのつながりタイプを更に、詳細に8つの分類をおこなった。各8つのタイプの特徴は表5に示すとおりである。



その結果、図6に示すようにタイプ4とタイプ5で高群と低群の比率が入れ替わっている事が判る。このタイプの違いは、一対一の友だち関係から一対複数の友だち関係に移行する変わり目になっている所である。すなわち、集団で友だち関係を築き始める転換点になっているといえる。また、この点を境にして、学校ざらい感情得点の高群と低群の違いが生じる事が明かになった。このことから、学校ざらい高群の児童は、タイプ6や7のようなグループ集団に所属することが少ない

傾向にあることから、一対一のペア的な友だち関係から、複数の友だちに関わるような状況にないことがわかる。

次に、友だちのつながりタイプの違いによって、学級に対する満足度にどのような傾向が見られるかについての検討をおこなった。学校ざらい感情の高群と低群における、友だちのつながり8タイプと学級に対する満足度の関係を見るために、Q-Uテストによって得られた承認得点と被侵害得点を座標上にプロットした(図7)。これらの結果から、プロット分布図をみると、大きく3つの領域に分布していることが判る。そこで、それぞれの分布をA

表5 友達グループの8つのタイプ

タイプ	友達グループのタイプの特徴
タイプ1	学級集団から孤立状態にある児童
タイプ2	学級集団から孤立状態にはなっていないが、どのグループにも属していない児童
タイプ3	二人のペアでつながっている児童
タイプ4	直線の形で三人以上の友達がつながりになっている児童
タイプ5	グループではなく、放射状の関係でつながっている児童
タイプ6	三角形の形で三人グループを形成している児童
タイプ7	三角形の形をもちつつ、四人以上のグループを形成している児童
タイプ8	メイングループの誰かに単独でつながっているサブグループ児童

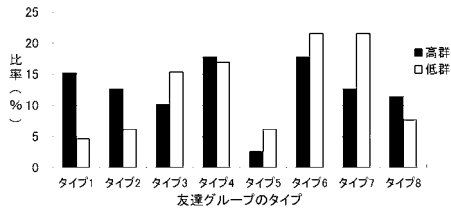


図6 各群における8つの友達グループタイプの比率

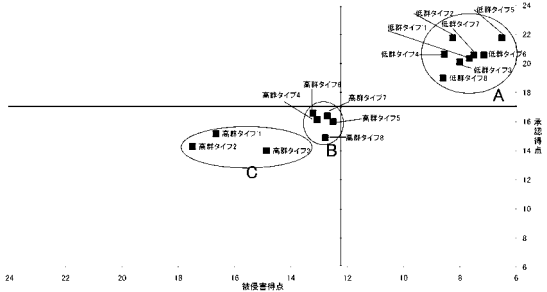


図7 8つのタイプのプロット図

領域、B領域、C領域とした。A領域は学級生活満足群に分布しているグループで、学校ざらい感情の低群に属するタイプ1～8のすべてが分布している。B領域では、学級生活不満足群に属するが、座標上の交点、すなわち、分布図の平均値の近くに分布している。したがって、中間的分布と見ることが出来る。この領域に分布している友だちタイプは学校ざらい感情の高群で、タイプ4・5・6・7・8が分布している。C領域は、完全な学級生活不満足群の領域にあり、学級に上手く適応出来ないことから、要支援の対象になる領域である。この領域には、学校ざらい感情の高群であるタイプ1・2・3が分布している。このような分布状態から判断して、学校ざらい感情の高群と低群では、学級への満足度においても明らかな違いが生じていることが判った。すなわち、学校ざらい感情の低群に属する児童は、友達のつながりタイプに関係なく、学級に満足している傾向を示している。それに対して、学校ざらい感情の高群に属する児童は、学級不満足よりの中間領域か、不適応状況にあって支援の必要性が非常に高いといった不満足領域に分かれて分布している。その中でも、タイプ1・2・3のような、孤立児もしくは友だちのつながりが弱い児童ほど、学級への不満感情が高く示されており、不登校対策の支援が必要な領域の条件と一致している。しかし、学校ざらい感情が高くても、タイプ4・5・6・7・8のようなある程度友だちとのつながりが出来ている児童では、A領域とC領域の中間、すなわち満足とも不満ともいえない中間的状況として、座標上の位置に分布していることが明らかになった。

## 考 察

予備調査において、学級集団が形成される時、学校ざらい感情の要因が友達同士のかかわり方に影響を与えていることが明らかになった。特に、ソーシャルスキルと学校ざらい感情との関係では、かかわりスキルにおいて有意差がみられたことから、友達関係を形成するために、自分から他者に働きかけていくスキルが重要な要因になっていることがわかった。すなわち、学

校ぎらいになる児童は、友達とのつながりを形成するスキルが低い児童であることから、グループ集団に入れずに孤立する傾向にある。そのため、友達との関わり方についてトラブルが生じやすく、さらに悩みを抱えることになり、次第に孤立を深めるといった悪循環になっている状況が明らかになった。

戸ヶ崎・嶋田・坂野・上里（1995）の研究によると、社会的スキルを多く獲得している児童生徒は、多様な形態の友人関係を築くことができることから、場面の状況や他者に対して、不適応感を感じる事が少ないと報告している。今回の予備調査では、戸ヶ崎らの研究を支持する結果となったといえる。

本調査でも予備調査とほぼ同様の結果が得られており、学校ぎらい感情が高い児童ほど、学級集団の雰囲気や他者とのかかわりについて敏感に反応していることも判った。特に、友達との関係をつくるために、自らかかわろうとはしているが、そのスキルの使い方や内容の不満さのためか、あるいはスキルそのものを十分に学習していないために、他者とうまくかかわっていくことができないことが明らかとなった。また、学習意欲においても低い傾向がみられることから、学級内において心理的に悪い状況にあるといえる。佐藤・佐藤・高山（1988）は、社会的スキルの欠如を示す子どもは、仲間からの受け入れが悪いことを明らかにしている。したがって、社会的スキルの取得が十分でなく、他者との関係において問題が見られる児童・生徒自身は、学校や学級などの集団場面において、人間関係にまつわるさまざまなストレスを体験していることから、学習意欲が低下したり、問題行動を出現させたりしていると考えられる。このような状態を軽減させるためには、学級集団づくりの過程で個別プログラムによる基本的なスキル指導を取り入れると同時に、他者とのかかわりができるような集団の雰囲気づくりも重要である。

学校ぎらいの高群、低群と、友だちタイプの関係において、学級における満足度がA領域、B領域、C領域と分かれることが明らかになった。A領域は学級満足群と考えられる領域であることから、集団内でルールやリレーシ

ョン（相手を思いやる気持ち）が十分に確立されており，児童同士がのびのびと楽しい集団での生活ができる学級集団と考えられる。したがって，このA領域には，学校ざらい低群のすべての友だちタイプが分布していることがわかった。本来なら，タイプ1・2の児童の場合は，周りから認められなかったり，集団に対して不快感を感じて学級生活を送っていると考えられていた。しかし，今回の結果では，学級集団に対して満足感を示している。このことから，タイプ1（孤立児）やタイプ2（周辺児）であっても，学級の雰囲気良好であると学級を親和的に受けとめて学級生活を送っているといえる。したがって，そのような学級の雰囲気を作り出している要因の1つとして，学級を経営する教師の指導力が大きく影響しているといえる。

小野寺・河村（1999）は，中学生対象の研究ではあるが，自己開示度との関係において，自己開示が多いほど，学級生活満足度においても有意に高いことを明らかにしている。このことは，自己開示によって，学級内で自分自身の気持ちや思いを積極的に開示することにより，学級への安心感が生まれ，それが満足度につながっていることを示している。すなわち，友だちや担任に自分の思いを受けとめてもらうことができることは，学級集団内で，自分自身が認められることにつながっており，学級集団内における居場所がある気持ちを持つことができる。その気持ちが学級満足度に示されているといえる。逆に，自己開示が十分に示されない児童・生徒は，学級内で自分自身の気持ちや思いを開示できないことから，学級内での存在感や意識が薄くなり，周囲への阻害感や侵害感の認知が高まる傾向にあると考えられる。

C領域の児童の被侵害得点が，A領域やB領域の児童の被侵害得点より高いのは，友だちとうまくコミュニケーションがとれず，嫌な思いをしたり，嫌がらせを受けていると感じている状況が考えられる。問題は，そのような気持ちを生み出す集団では，約束事が守られない学級の雰囲気になっていることが考えられる。また，C領域の児童では，A・B領域の児童の承認得点よりも低く，他者と気持ちをわかち合う状況が生じていないことでもある。特に，C領域の児童の気持ちには，学級経営のリーダーである教師との関係

もうまく結べていない状況が生じていると考えられる。そのことは、自分を守ってくれる存在や、自分を認めてくれる存在がないといった感情を生起させやすく、そのことが孤独感や学校ぎらい感情をより高めているといえる。このようなことから、プロット分布の位置が示すものは、学級集団内における教師や友だちとのかかわりのレベルとみることができるといえる。また、友だちとの気持ちのやりとりが十分にできないこと、すなわち、そのスキルが十分に体得されていないことが、友だちタイプにも明確に現れており、結果としてプロット分布図では、学級不満足群の中に位置し、支援を必要とする対象児にもなっているといえる。

本研究では調査対象の学校が1校であることから、地域間格差の視点については考慮できていない。また、友だちタイプと性格傾向や学習能力との関係についても検討する課題が残った。今後は、孤立タイプからグループタイプといった友だちタイプの転換点になっている児童のソーシャルスキルの内容を明らかにすることにより、支援を要する児童へのプログラムを検討する方向についても検討したいと考えている。

### 引用文献

- 古市裕一 1991 小中学生の学校ぎらい感情とその規定因 カウンセリング研究, 24, 123-127
- 古市裕一・玉木弘之 1994 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- 前田健一 1995 自動機の仲間関係と孤独感—攻撃性, 引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析 教育心理学研究, 39 (2), 182-185.

- 小野寺正己・河村茂雄 1999 中学生の学級満足度と自己開示との関係の考察 カウンセリング学会第32回大会発表論文集, 259-260.
- Peplau, L.A., & Perlman, D. 1982 *Loneliness : A sourcebook of Current Theory, Research and Therapy*. New York : John Wiley & Sons. (加藤義明 (訳) 1988孤独感の心理学 誠信書房)
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1988 仲間関係に問題をもつ子ども—仲間アセスメントによる分析 宮崎大学教育学部紀要教育科学, 63, 17-23.
- 柴崎祐子 2004 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1996 児童の社会的スキル獲得による心理的ストレスの軽減効果 行動療法研究, 22 (2), 9-19
- 戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・坂野雄二 1997 中学生の社会的スキルと学校ストレスの関係 健康心理学研究, 10 (1), 23-32.
- 戸ヶ崎泰子・嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 1995 社会的スキルの変化が友人関係と学校不適応に及ぼす影響 日本行動療法学会第21回大会発表論文集, 180-181.
- 吉川栄子・高橋宗 2007 学級集団を形成する要因についての検討—学級満足群と友達関係において 聖泉論叢, 14, 113-125.

## 付 記

1. 本稿は平成20年度私立大学等経常費補助金特別補助 地域共同研究支援の助成による研究成果である。
2. 本研究の実施データの処理等において, ご協力を賜りました聖泉大学人間学部人間心理学科4回生の小林弘幸君に感謝申し上げます。